

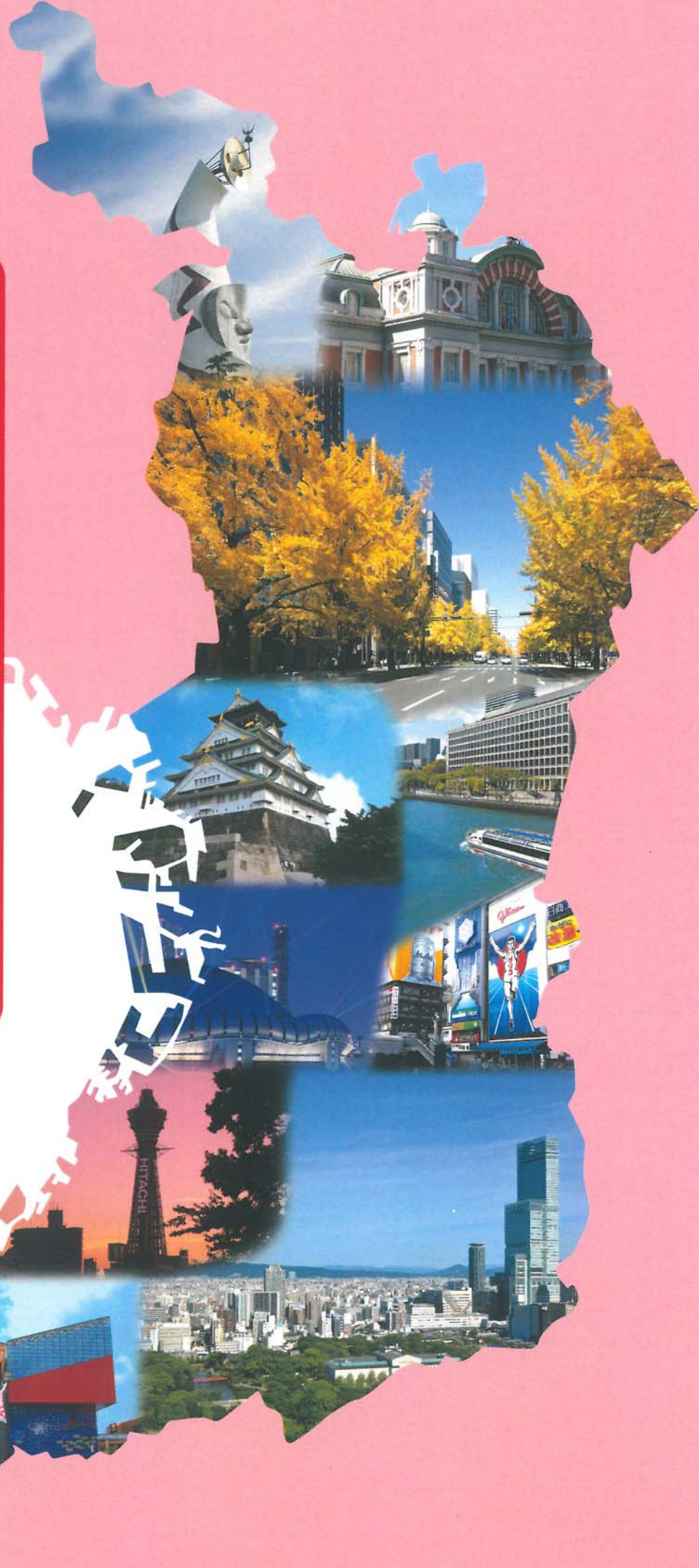


OSAKA

# 大阪 ものづくり企業

平成30年度ものづくり補助金 成果事例集

競争力を高める



## 株式会社 レザック

3次元レーザー測定機で  
精度やレベルを“見える化”

## 事業内容

## 総合紙器メーカーに生まれ変わる

昭和57年の設立以来、抜き型システムメーカーとして商品パッケージなどの製作に携わってきた。最近では総合紙器メーカーに生まれ変わりつつある。優れた機械やシステムを提供すれば良かった時代から、今は使用環境に応じた機械やシステムの設計やレイアウトが求められる。そのため、営業担当者のほか、設計や開発、技術などに関わる社員が顧客を訪ね、要望に基づいた提案を行う。ハード、ソフト両面を考えなければならないため、緊密な連携が必要だが、これを顧客に対する有形無形のサービスと捉える。

## マスターブランクが期待の製品に

製品ラインアップも変化し、「マスターブランク」が注目されている。箱を作る際の型抜きをした商品と不要部分を分ける落丁<sup>らくちよう</sup>工程の自動化を推進するもの。従来は手作業にたよらざるを得なかったが、ここに柳本忠二会長が着目して開発。ここ5年で発注が急増するなど、期待の製品となっている。

## 補助事業

## 機械や加工物の精度向上を実現

機械を構成する各部品は、既存の設備を用いて高精度化を追求してきた。その部品を人の手によって組み付けていくが、加工機械の精度やレベルが加工物の精度に直結するため、この実現に3次元レーザー測定機が不可欠で、平成28年8月に「ものづくり補助金」を活用し導入した。導入以前は水準器の活用や熟練技術者の長年の経験値で対応してきた。ただ、限られた要素での対応になり、感覚の作業にもなる。

## 機械サイズの大型化対応にも貢献

さらに、設置場所の微妙な傾斜まで勘案しなければならない。顧客によっては精度の証明を求められるケースもある。同測定機の導入により、精度やレベルの“見える化”追求につながり、信頼性の証しにもなる。信頼性を担保できるところから導入に踏み切った。特に、機械のサイズが大きくなればなるほど、精度確保の難しさやチェックポイントの増加があったが、これらの解消にも寄与することになった。

## 株式会社 レザック

代表取締役 柳本 剛志

〒581-0038 大阪府八尾市若林町2-91

TEL. 072-920-0394 FAX. 072-920-0392

資本金/50,000千円 従業員/70名

主な取引先/印刷紙器メーカーなど

主な保有設備/NC旋盤、複合旋盤、平面研磨機、  
放電加工機、マシニングセンターなど主力製品/CAD/CAMシステム、レーザー加工機、  
落丁機、自動製図器など

短納期	企画力	オンリーワン技術	海外対応	連携力
-----	-----	----------	------	-----

## 社員とともに成長していきます

代表取締役 柳本 剛志

3次元レーザー測定機の導入でさらなる成長が見込まれます。そこには社員の成長がカギを握ります。そうした環境づくりに加え、ともに成長することが重要だと考え、体制づくりを進めていきます。


<http://www.laserck.com/>



導入した「レーザートラッカー」



落丁機「マスターブランカー」



本社外観

### 具体的成果

#### 測定作業の負担軽減や効率化を促進

導入以前は、特定の社員にかかっていた負担の軽減と作業分担につながった。扱い方を習得すれば、技術レベルの個人差解消も可能に。また、測定作業は何度も行わなければならなかったが、一度の作業で完了できるようになった。作業の効率化が図れたことで、納期の短縮とともに、他の作業にマンパワーを振り分けることができた。しかも、これまで受注できなかった大型機にも対応できるため、品種の拡充が実現したことも見逃せない点だ。

#### メンテナンスなど、幅広い活用も

レベルが維持されることによって、機械に組み付けられている部品の耐久性も向上し、機械のメンテナンス頻度も減らすことができる。また、機械に対して新たなオプションの追加要求が増えつつある。こうしたオプションも、設置場所のレベルを測定して取り付けることで、幅広い対応が可能になる。機械の基礎やオプションにとどまらず、納入後10年程度経過した機械のメンテナンスにも活用できる。自社の工場のみならず、顧客の現場にも持ち込めるため、使い方が幅広くなるとみている。

### 今後の戦略

#### 異種工程の複合化を追求

印刷紙器メーカーも多種多様で、従来の分業制からトータルに対応できる企業に変貌しつつある。そのため、設備導入は進んでいるが、一方で人材の確保が難しい時代になっている。人材の確保が難しい状況では、企業として限られた人員の効率的な配置や活用が待たなしになっている。ここをターゲットにした機械開発を進めていく。中でも、紙器製作には数多くの工程があるが、製造工程の自動化や効率化の推進につなげるため、異種工程の複合化を追求する機種開発が今後の目標となる。

#### 予想以上の展開みせる海外事業

一方、平成29年に立ち上げた海外事業部は約1年が経過した。この間、欧米合わせて3台の機械を納入するなど、予想以上に順調な推移を見せている。当初の目標は月1台の販売であったが、このペースだと予想より早く目標をクリアできそうな勢いにある。そのほか、紙器パッケージ向け以外の新たな分野として、薄物ラベル業界向けの新機種開発にも取り組んでいる。海外を中心に展開する考えで、海外事業部の活躍の場がさらに広がる。

### 取材を終えて

#### 確固たる地位構築への 意気込みが

「考える暇がないぐらいに忙しいのはいいことだ」という柳本剛志社長の言葉を借りれば、新たな取り組みが順調な推移を見せていることの裏返しであろう。今回導入した3次元レーザー測定機も大きく寄与していることは間違いない。紙器パッケージにとどまらず、新分野開拓を進めることで、総合紙器メーカーとして確固たる地位を築こうという意気込みがひしひしと伝わってくる。その実現を「社員と共に」という思いがこもっている。